
『羞恥は捨てて』

愛弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『羞恥は捨てて』

【Zコード】

「Z3383」

【作者名】

愛弥

【あらすじ】

鏡には、ある願望があります。それは、恋人の雪と手を繋ぐこと。

(前書き)

高校一年生の鏡と雪は、男同士で泣き合っている。

ある日、デートをしている時、鏡はある願望を叶えてもらおうと雪に願いします。

その願望といつのは、普通の道中で、手を繋ぐこと。

羞恥は捨てて、
たまには
道中で。

『羞恥は捨てて』

わざわざ、と騒ぐ道中。

久しぶりに、あいつとデートをしていた。

デートって言つても、ただ他愛もない会話をして、ただ単に肩を並べて歩いているだけ。

端から見れば、デートしているようになんて見えないだろ？

男女一人が、歩いていれば、まあたいていの人はカップルなんだな
と思うだろ？けど。

俺も男で、あいつも男。

そり、俺らは男同士で付き合つている。

だからカップルらしい行動をそつそつ出来ない。

いや、俺は別に構わないんだけど。

あいつが嫌がるんだ。

恥ずかしがり屋なのか、ちょっとしか人がいない道でも、手を繋ごうとしたら怒つて手を振り扱われるし。

照れてちょっと顔を赤くすることとか、可愛いんだけど。

いつも恋人らしい行動が出来ないのは俺的に嫌だ。

だって、折角思いが通じ合つて付き合えるようになつたって言つたのに。

恋人らしい行動が出来ないなんて。

悲しそうな感じじゃないか。

それをおいつに言つたら。

『外でやんなくたつて、家の中でもがむこ程くつこしてゐるだらう』

つて言つんだ。

本当にあいつは俺の気持ちを全く理解していない。

俺は、家でも、外でもあいつといひやつきたいの。

もつと言えば、回りに見せ付けたいがらしさと思つてゐる。

『おつは、俺の恋人だつて。

俺達は、付き合つてゐつて。

回りに教えてやりたいんだ。

まあ、言葉を変えれば自慢したいつてこいつだけど。

俺は、こんなにもかつてかくして、可愛いうれしい恋人と付き合っていたんだって。

皆に囁きたいんだって。

そんなことをあこつこ書いたら、怒られるだらうナゾ。

でも、たまには俺の願望を叶えてほしこものだ。

たつた一つ。

たゞある中から、小さい願望でいいから、叶えてほしこ。

だけど、そんなことを頼んだつとあこつよ。

『ふわけるな』

と書いて怒るだらうから。

今回は許可を取り次ぎ、元無理矢理せつせつと書いた。

たまには強引なのもいいんじゃないかな?って思つんだ。

「いつもしないこと、俺の数ある小さな願望が、叶えられる時はこな
いと懸りかかる。

「あいつ…おまつ、鏡…！」

「…………」

「鏡つ…トメ、離せ…！」

「ああ、ヒ無言であいつの右手を掴んで、少し急ぎ足で道を進んだ。

突然握られた手に驚いたあいつは、俺の手を離さうともがいている。

だけど、離すものかと俺が強く握っているから、俺より少し背の低
いあいつはびっくり失敗したらしく。

力で離させるのはやめて、今度は口で攻撃を開始した。

「鏡…！ 聞いてんのか？！ 離せ…！」

「……なあ、雪」

「…………なんだよ」

ぴたり、と足を止めてあいつと向き合つと、あいつはなんだか罰の
悪そうな顔をしていた。

だけど、ほんのつと頬が色づいてくる。

「たまには俺の我が儘聞いてくれたつていいんじゃない?」

「……ハ?」

「俺、雪とこいつやつて恋人らしに行動がしたかった」

「家でやつてんだろ」

「違う。俺は、外でもしたいの」

外でも、普通の恋人達みたいに、手を繋いだりして歩きたいんだ。

どこの乙女だつて、何時もお前はそういうけれど。

やつと好きな人と一緒になれたんだ。

恋人だからこそ出来る行動をしたいって、思うに決まってるじゃないか。

「…んなの知るか」

どれだけ、俺の我が儘を聞いて欲しいって言つても、全く叶えてくれようとしない。

どうして俺の恋人はこんなにも、シンの部分しかないのだろうか。

「なあ、雪。そんなに俺の我が儘聞いてくれない?」

「ああ。」

「ふうん。……じゃあ、今夜は覚悟しといてね」

「……ハ?」

「眠たい、だなんて我が儘言つたつて俺聞いてやんないから」

ぱ、とあいつの手を離し、すたすたと一人で歩き出すと、2テンポ遅れて、焦りながらあいつも歩き始めた。

そして、

「…今回、だけ…だからな。」

やつとりでレを出してくれた恋人は、俺の右手を軽く握ってくれた。

そんな行動に思わず、笑みが零れる。

「じゃあ今夜は許す

「…当たり前だ

「あーでも、どうしようかな。今日の雪めっちゃ可愛かったし

「ハア？」

「嘘嘘。やんないよ。まあ、俺の理性しちだいだけど

「…馬鹿が」

今日、俺の小さな願望が叶いました。

それを叶えてくれたのは、今隣でぐっすりと眠る、可愛い恋人。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3383j/>

『羞恥は捨てて』

2011年1月8日20時04分発行